

川の中の毛布

イーシャ・サーデサイによる再話

その川は流れが速く、水はその流れにある岩に当たってしぶきを上げ、さもなければとどまることなく流れていました。二人の男——双方とも若い男たち——は、その急流の岸に立ち、不安を抱えて流れを見ていました。彼らは渡らなければならなかったのです。でも、どうやって？

何時間か前に、二人はハイキングを一緒にしていた仲間とはぐれてしまっていました。彼らは、北米の人里離れた地帯——カナダの深い原生林のどこか——にいました。重い足取りで歩き続け、仲間たちか、あるいはキャンプに戻る道を探していました。やっとのことで、彼らはこの川岸に着いたのです。

男の一人、レミが、靴を脱いで、爪先を水の中に漬けました。彼は、わずかにたじろぎました。冷たかったのです。

彼は余分な服を脱ぎ始めながら、友の方を見ました。

「レオン、準備はいいか？」と言いました。

レオンは、何も言わずにじっと水面を見ていました。彼の顔は蒼白(そうはく)で、唇は震えています。

レミは、彼の腕をそっと引っ張りました。「おいで、今だ。楽な旅ではないけど、でも君ならできるよ。君は泳げるじゃないか」

レオンは一言も発せず、うなずきました。彼の顔は青ざめたままでしたが、彼らは一緒に川の中に踏み入りました。すぐさま水の衝撃が来て、彼らの身体を流れへと押しやりました。

全身の力と、ありったけの勇気も振り絞って、レミは片手を、そしてもう一方の手をと、水をかきました。脚を後ろに蹴りました。彼はこの動きを繰り返し、ストロークの合間に大きく息を吸い、やがて数分の大変な思いの後、自分のリズムをつかみ始めたと感じました。バランス感覚が戻ってきて、身体は水の流れに合わせて動き始めました。彼は、水流に沿って行けると分かり始め、水がどのように、どこへ流れて行くかに注意しながら、それに応じて自分の泳ぎを合わせ始めました。「そうだ」と、彼は思いました。「そうだ、僕にはできる」

そして、波に身を任せると、所々で温かい流れを感じました。視界は再び広がり、すぐ目の前の水を越えて先の方まで見渡せるようになりました。そして、川を渡るためのすべての道筋が見えました。例えば、浅くなっているらしい所が幾つかあり、流れが緩やかになっているような所もあります。

「レオン」と、彼は言いました。「あれが見えるか？」レミは、流れがより穏やかな所の一つを見せようと思い、友を探して見回しました。

しかし——視界のどこにも、レオンはいませんでした。

「レオン！」と、レミは再び叫びました。今度は切迫して。「レオン、どこにいるんだ？」彼は身体の下で脚を一生懸命動かしながら、左右を見ました。水は勢いよく流れ、泡立っています。人の気配は全くありませんでした。

ついに、とてつもなく長く感じた後に、どこか下流の方からかすかな声が聞こえました。

「レミ——レミ、そこにいるのか？」

「レオン！ 君か？」

レミは、できるだけ速く声のする方へ泳いで行きました。間もなく、彼は川がカーブしている場所にたどり着きました。そしてそこで、水から突き出た大きな岩にしがみつき、脚をやみくもにバタバタさせているのは、レオンでした。気まぐれで命令するような川の流れに、彼の身体は上下左右に浮き沈みし、もまれています。

「レオン！」と、彼は叫びました。「一体、何をしているんだ？」

レオンは視線を上げ、友を見ました。「レミ！」 彼は応え、その声は苦悶(くもん)に満ちていました。「僕はこんなことできない！」

「何を言ってるんだ？」 レミは叫びました。「泳ぐんだ、レオン！ そんなに大変じゃないことを保証する」

「だめだ、だめだよ、無理だ。これはひどい考えだった」と、彼はうめきました。彼の顔に水しぶきが掛かりました。

「レオン、僕の言うことを聞くんだ…」

しかし、レオンは聞こうとしませんでした。「僕にこんなことができるという君の言葉を受け入れたなんて、信じられない」と、彼は言いました。

「レオン——とにかく泳ぐんだ！」

「言うのは簡単さ！」レオンは心の中で思いました。「レミは泳ぐのがとてもうまいんだ」。レオンは弱々しく泣き出しました。水は依然として、彼の身体を上下左右にもてあそび続けています。

ちょうどその時、レオンは目の端で、川面をこちらに向かって何かが勢いよく流れて来るのを見ました。それは大きくて、茶色で、もじゃもじゃして見えます。

「レミ、レミ——見ろ！」彼は興奮して言いました。「これを使ったら渡れる」

レミは流されまいと泳ぎ続けていて、通り過ぎるその物体に気づきませんでした。そこで、それがレオンの方に流れていくのをよく見ようと、目を凝らしました。

「それ、何だか分からない……」。彼は少しして言いました。

一方、レオンはすでに、その大きな茶色い塊をつかもうとしていました。「これ、毛布だと思う！」と、彼は叫びました。

「えっ？」レミが言いました。「毛布で川を渡った人なんて聞いたことがない。いい加減にしろ、レオン、泳いだ方がいい」

しかし、レミの言葉にどんな効力があるかと、彼はまるで水に向かって話しているようなものでした。レオンは毛布の上によじ登るのに必死でした。何度か足を滑らせたが、ついにその上に乗りました。彼は両手でそのひだをしっかりとつかみました。

一息ついて、毛布の上に身をかがめて座ると、彼の身体は密集したもじゃもじゃの毛に沈みました。彼は、長くゆっくりと安堵(あんど)のため息をつきました。フーーーーーッ。彼はもう安全です。

実際、彼は毛布の上ですっかり安全だ、大丈夫だと思っていて、いまだに下流に流されていると気づいていませんでした——ものすごい速さで。毛布が期待していたほどには浮力がないことにも気づきません。そして安定していないことにも。

最初、それは彼の下で穏やかに揺れ動いているだけでした。水面をいかだで流れる時にはそうなのだろうと思える程度に。しかしそれから、流れが強くなると、毛布はそれに応じて激しく動き、一部は完全に水の中に漬かってしまいました。

そして、毛布がよりもまれるほど、レオンはよりきつく、それにしがみついているようです。足からみ合わせ、両手で抱きし締め、全身をそれに擦り寄せて。

まだ上流にいたレミは、この光景が展開するさまをぞっとして見詰めました。「レオン！」彼は叫びました。「お願いだ！ 聞け。その毛布を放せ！」

レオンは答えません。彼はこの時までには、猛烈にもがいていたのです。まるで毛布と格闘しているかのように見えました。水が、レオンと毛布、その両方の周りでバシャバシャとしぶきを上げて渦巻き、レオンたちは絶え間なく水面の下に消え、瞬間的に浮かび上がるばかりでした。

「手を放せ！」レミが叫びました。

やっとのことで、レオンが言いました。「できないんだよ！」彼は泣きながら訴えました。

「できないってどういうことだ？」

「これ——これ、毛布じゃないんだ」。絶望的な声が届きました。

「じゃあ、何？！」

「クマなんだ、レミ！ クマが僕を放してくれないんだ！」



© 2019 SYDA Foundation®.著作権所有。